

第4回 向日市子ども・子育て会議 議事要点録

○日 時 平成26年8月8日（金）

○場 所 向日市民会館3階 第5会議室

○出席者 （委員）

安藤和彦委員（会長）、今井弥生委員、大嶋一恵委員、風谷千賀子委員、櫻井成委員、高橋一巧委員、高山紀公子委員、田中久美子委員、田中益一委員、築山剛委員、津田陽委員、花安肇委員、三沢あき子委員、宮地健一委員、山近勤委員（50音順）

（事務局）

子育て支援課：植田部長、鈴木次長、坂野課長、野田主幹、里見保育係長、山下主任保育士

生涯学習課：野田部長、山根次長、清水次長、高岸係長

○欠席者 （委員）

小西委員、岡崎委員、川原委員、田中利和委員、青木委員

○内容

- （1）向日市特定教育・保育施設及び特定地域型保育事業の運営に関する基準について
- （2）向日市家庭的保育事業等の設備及び運営に関する基準について
- （3）向日市放課後児童健全育成事業の設備及び運営に関する基準について

資料① 特定教育・保育施設及び特定地域型保育事業の運営に関する基準（内閣政令）に対する向日市の考え方

資料② 家庭的保育事業などの設備及び運営に関する機銃（厚生労働省令）に対する向日市の考え方

資料③ 放課後児童健全育成事業の設備及び運営に関する基準（厚生労働省令）に対する向日市の考え方

議事1 向日市特定教育・保育施設及び特定地域型保育事業の運営に関する基準について

（主な意見）

- デンマークには、デイケアマザーというシステムがある。いわば保育ママのデンマーク版で、定員1名から3名を1人のデイケアマザーが見てサポートしていく。1週間に1度その人たちが集まる場所がある。担当している子どもたちも、社会的に集団を体験できる。個人も孤立することなく、行政も連携しながら活動していくものだ。向日市は小規模なので、全国に先駆けて積極的にこのようなシステムを取り入れたらよいのではないかと思う。

議事 2 向日市家庭的保育事業等の設備及び運営に関する基準について

(主な意見)

- 家庭的保育自体は、5年か6年前からある制度だ。今までやってきたものがあるのかどうかの検証もいる。
- かなりの施設と人員を用意して家庭的保育事業を実施している市もある。向日市が同じようにするのは財政的に不可能だが、家庭的保育事業をどこか手直ししたら何か考えられるかもしれない。
- 色々な方が意欲を持って子どもを育てるということについては、新しいメニューが色々あり、参入されてもよいと思うが、負担になりすぎないようにしてほしい。保育士資格を持っていても、外に勤めに行くのは嫌だが、自分でやるのは考えてもいかなという人もいだろう。その時に、やってみようという人にとって負担になりすぎないようにしなければならないのではないか。
- 京都の南部では、保育所がシャッター通りの一部やマンションの一室を借りて所属保育士を出先の保育士として派遣し、連絡を取りながら運営しているというものがスタンダードなやり方としてある。
- 家庭的保育事業は、結果的には、待機児童対策に使われてしまったという問題点もある。家庭的という名前にこだわるのか待機児童対策でやるのか、そこを混同してはいけない。
- 遊具や散歩や外遊びをどうするか。保育園が連携して、保育園の中で保育士が携わるのであれば分かるが、一人でやりたいという人は、どんな人か。保育メニューとして挙げられてはいるが、余程の行政のバックアップがなされ、さらに、保育所と連携して保育所の園庭を使えるなどの枠組みを作らないと、絵に描いた餅になるのではないか。
- 訪問事業として子どもを見守るということであれば、ある程度の専門性が必要だと思う。現状のファミリーサポートセンターは、地域の助け合いでやっておられるが、保育ができる方ばかりが登録されているわけでもない。専門性が必要な障がいを持たれる方への支援としては、なかなかマッチングができないという話も聞いている。
- ベビーシッターには一定の需要がある。現状で困っている人をどう助けるか。保育ママなどの今の仕組みを上手に使えないか。家庭的保育事業を少し柔軟に考えられたら、保育ママは良いのではないかという気がするが、大前提の人材がない。保育の専門家である主婦層がいるが、資格の問題がある。家庭的保育事業がもう少し使いでのあるものになればよいと思う。惜しいことだ。

議事 3 向日市放課後児童健全育成事業の設備及び運営に関する基準について

(主な意見)

- 幼稚園、保育所から小学校に上がった時に仕事復帰される方が多いと思う。到底足りなくなると思うが、数的なものがないのではないか。
- 1年生から6年生と一緒に過ごすといっても、遊びも違うだろう。小学校自体には1年生から6年生までいるが、クラスは分かれている。時には兄弟のように過ごす体験も良いだろうが、思春期の子どもがずっと幼い子ども達と一緒にというのは問

題ではないか。

- 子どもを成長させるのは家庭であり、その基本は外してはいけない。しかし、家庭で育てることについては確かにほころびが出ているので、そこをどう支えるかを考えなければならない。
- 保幼小連携はうまくいっていない。教育面での連携が必要だ。
- 小学校の担任は、どの児童が学童に行っているかを把握しており、日々連携を取るようにしている。夜や土曜に保護者会と懇談会をすることがあり、学校の先生も来てくれませんか、といった要請もある。数は多くないが、子育て相談の場も持っている。学童の指導員が職員室に寄ったときに、学校での子ども達の様子を尋ねることもある。
- 次回、公定価格の話が出ると思うが、そうすると利用者負担の問題が出てくる。仕事を減らして子どもを自分の手で育てており、家庭での保育や幼稚園を希望する人たちには、援助がない。利用者負担の問題では、子育てのあり方を数値として検討していきたい。

以 上